
占夢者人の夢 ~四ノ巻~

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占夢者人の夢 ～四ノ巻～

【Zコード】

Z2869E

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

折柄島で、雅樹は自分の相剋である陰陽師を仲間に加えていた。そんな平衡時間で、叶達一行も広島へと旅立つ。その広島本島には仲間である陰陽師を見つけられず、安芸の宮島へと足を伸ばした。そこで、不思議な力を持つ少年と遭遇。それは叶達が捜している陰陽師なのであるつか?ファンタジックな味付けをした第四巻、此処に開始。

プロローグ

朔夜、叶達が水城と云う火を操る陰陽師を味方に付けた沖縄の温暖な気候から一変して、ここ、北海道の北東に位置する択捉島。その島の北東に位置する神威岳は、季節には早すぎる雪が降る程の厳しい寒氣にみまわれていた。そして厚着をして万全な体勢ではいるが服を突きぬけ肌に刺す氷針のような風は雅樹の氣を乱していた。確かにこの辺りのハズなのだがと辺りを見渡す。真っ白な視界に埋もれそうで少し意識が朦朧としたが、神が味方したのか目的の地に無事辿り着く事が出来た。

それを確認した時、自らが受け入れた宿命と向き合い、自らの首から下げる笛型の口ケツトをある思いを込めて決意を新たに握りしめる。これから始まる自らの使命を果たす為に……

出迎えたのは大柄で、2メートルはあるであろう背丈に体つきが厳つい巨漢の、髭を惜し気も無くのばした三十過ぎの男であった。そしてその男こそ捜していた人物である事はすぐに分かった。この男の体からは陰陽師特有の気が発せられている。そして、これから先無くてはならない仲間である事は分かりきっているので、雅樹自身肝に命じて言葉を選らばなければならぬとを思つていた。

「何じゃいお前は？」

こんな所迄やって来る者がいるとは思つていなかつたかのような、訝しげな表情でその男は問いかける。確かに、わざわざこんな所迄出向く者はいない事は分かつた。降り積もつた辺り一面の雪には自らの足跡しか残されてはいない。

「あなたと同じ、五行を司る陰陽師ですよ。話は中でさせてもうえませんか？道中厳しい雪で凍えそうですからね」

「……判つた。中に入れ……」

少しぶつきらめきな物言いではあるが、あつさり中に入れる辺り人が悪い訳では無そうだ。中はこの土地に住まない者にしかわからぬのであるうと思われる程、完壁に冷氣を遮断しており、男はのつそりと温かい部屋を案内した。そして、身体を温める為に用意してくれたお茶を飲んだ所で男は話を切り出して来た。

「……で、儂が五行を司る陰陽師と知つとるお前が何故此処にやつて来た。わざわざここ迄きたお前に言うのもなんだが、言い伝えを守る為にも儂はここを動くつもりは無いぞ……」

男はまるつきり興味が無いと云つた感じで、突き放すように雅樹に言い放つ。

「そう言つ訳にも行かないのね……所であなたは言い伝えを何処迄知つてるんだい？」

当然の言葉を聞き入れ雅樹は改めて問い合わせる。

「五行が京都に集うことでの日本が窮地に陥ると云う事であろう？誰がそんな予言をしたかわからんが、余計な事を言つてくれるわ……そのせいでこんな所で生活せんといけなくなつた訳だからな」こんな会話をする為に来たのでは無かつたが、一通りの話を聞く。しかし全ての話を聞き終えた時、

「実はその予言の裏には、重大な事実が隠されているんですよ……そのまま雅樹は話し続ける。自らが解き明かした重大な真実を……

「で、儂の力を借りたい訳だな？」

「そうですね。敵は既に五行の陰陽師の内の一人に遭遇し仲間になつていいようですか。少しでも早い方が良い。荷物を纏めて、身なりを整え、俺について来て下さい。次に向う先はもう分かっていますから」

雅樹は、上手い具合に話が進んだと確信した。だから、

「俺は、五行の木を操る陰陽師。そして、この地であなたを仲間にする事が出来た。俺の相剋である土を操る事ができる陰陽師、泊源

蔵に……これからは宜しくお願ひしますよ」

その言葉を受け入れたのか、泊はゆっくりと手を差し伸べた。

この一室で雅樹が何を囁いたのか？それを知り得るのは、今の時点この二人しかいない。そしてこれから先の過酷な未来への第一歩であった。

#1 プロローグ（後書き）

お待たせいたしました。

何とか開始です。書きあがてるんですが、ゆっくり更新していく
たいと思います。最後までお付き合い頂けると嬉しいです。

雨の宮島

広島空港に到着した朔夜、叶、かえで、水城の四名は、大雨の空港から足を踏み出す事を躊躇っていた。それもそのはず雨天時の用意をして無かつたからである。

「朔夜ちゃん？ これからどうするの？」

とにかくいつまでもここにいる訳には行かないと思い、かえではつまんなさそうに独りごちていた。天候が悪いと返つて気分が優れないとしても云うように。

水城自身、この広島に来てからは余り良い表情をしない。何だかブスつと不機嫌であった。先程から下を向いて無機質な空港のロビーの床とジッとこちらを見つめている。

「しゃーないなあ。どつかで、一時休むか？ 僕が思つこな、この広島の南西に位置する所に目的としとる陰陽師がある気はするんやが……」

先に行つておいた五行を担う者に掛けた術による一種の勘である。「うん。お兄ちゃんが言うように、それは当つていると思うよ。この土地の氣の流れが教えてくれるから……本土にはいしないね……」

霸氣は無いにもかかわらず水城もそう答える。

「南西ですか……で、本土にいな」となれば、離島でしょうか

「南西ね」となると、一番有利得そうなのは、宮島かな？ あそこのが、厳島神社は有名だもんね？」

その言葉を受けいれるといなや、嬉々として広島の地図を広げながら、かえでは考えられそうな土地を指差す。

安芸の宮島。それは、日本三景としても有名で、京都の天の橋立、富城の松島と並べて名高い。その上世界遺産として指定される程有名だ。そしてそこは旅行者が多い事でも有名な土地である。

「神社かいな……」

叶は、いささか思い出したく無い事を思い出してしまつた。しかし、今はそんな事を思い出している暇は無いと振り切る。いつまでも過去の事を振り返つている事は前に進むに必要な事では無いとそう判断したからであつた。

一行は広島から空港を出、路面電車で一時市街へと足を運んだ。必要であろうと思われる物の買い出しど、雨宿りを兼ねてである。それから少しだけ、小腹が空き飲食店に入る事になつた。

「広島に来たからにはこれを食わにゃあな！」

「叶つて大阪人だよね？で、それで何でこうなるの？」

叶が進んで足を運んだ先は、広島特有のお好み焼き屋であつた。

「お好み焼きにも違いがあるもんや！俺は味にはうるさいでえ、早よメニュー見て決めんかい！」

大阪の平べつたいお好み焼きに比べて、広島のお好み焼きは何重にも重なつた層の上に焼きそばが乗つてゐる。その上にもまた層が。その重厚な満腹感を感じるに値するそれは大阪の物とはまた異なつていて楽しみ甲斐がある。

東京では、もんじや焼きが有名で、もちろん叶はその黙々と土台を作り、それを崩しては籠でチビチビと食べるのも面白いと思つていた。何にしろ、食いしん坊の叶にとつてこうやつて土地ならではの食を堪能する事は生きている上の楽しみであつた。

その叶に、かえでは呆れてはいたが店中に広がる香ばしい匂いには勝てずに早速メニューを見始める。他の朔夜と水城も同様で、かえでと同じ行動に出始める。何よりこの云つた時間は時が経つのを忘れさせてくれた。

「納豆のお好み焼きも有るのねえ〜」

そんな中、叶の苦手な食べ物を言つたかえでに苦い表情をした叶ではあつたが、メニューを厳選してじっくりと見るとオーダーした。そして、忘れてはならないと「飯も叶は頼む。関西人らしい所を

見せつけられ、残りの三名は口を開いて驚いてはいたが、何も気にしてない辺り、叶の神経は鈍かつた。

「うん。美味しかったね！」

水城は先程迄の不快な表情から一変した表情でテーブルの端で満足そうに笑っていた。

「せやろ～！さて、外の様子はどうやうか？」

今迄雨宿りをしていたような一行は、気になつたのか外の景色に目を配つた。

「小降りとはいえないようですが、降つてますね～この後どうします？」

デパートで買った雨具は万全。もちろん富島まで足を運ぶ事も可能だつた。

「時間にそこ逃余裕は無い事やしな～思い切つて出かけるか、……」

その一言で、朔夜達一行は船に乗る為に、富島口迄足を運び富島を目指した。

富島迄は、船を利用して足を運んだ。約十分もすれば目的地へと到着する事が出来た。遠目でも分かるくらいに目と鼻の先にある訳である。

水城はもちろんの事、朔夜や叶、かえでもその土地に足を運んだ事は無かつた。船を降りて取り敢えず観光名所の厳島神社へと地図を頼りに移動を開始する。四つの色とりどりの傘は、行き交う人達に紛れて右往左往しながら動いている。もちろん、水城の歩幅に合わせての移動なので時間がかかる。そんな一行に気を遣つたのか、そそくさと一行から離れ人目につかない所へと移動する。そして水城は、変化の術を使い大人モードへと変化した。

「こっちの方が、何かと身動きとれやすいでしょ？」

辺りに人けが無い所で行つた為、誰もその事には気がついた様子は見受けらない。

「え？この子があの水城ちゃん？」

かえでは水城のこの術の事を知らなかつた為、あんぐりと口を開けて呆然としている。

「かえでお姉ちゃんは知らなかつたんだよね？「うん水城だよ」「二口二口としたあどけない笑顔はやはり水城のものだと判り、かえでは何とか把握する事が出来たのである。そして関心したように不思議そうに大きな瞳を瞬かせた。

「うーん大人になつたらこんな感じになるんだ～でも可愛いから許しちゃう！」

かえではその水城をギュッと抱き締めた。端から見たら何をやっている一行なのだろうか？少し不自然では有るが、それに対し二口二口と微笑んでいる水城がまた可愛くて仕方なかつた。

「やはり、保父さんより保母さんがいてくれた方が心強いですね。叶？」

完全にかえでのお任当では水城一点に変わり叶は面白くは無かつたが、こいつ旅には必要なかも知れないと思つと何とも言えない心境だつた。

「でも、かえでちゃんがこの旅に同行して、危険やなからうか？俺らはええよ？それなりの事件やらで免疫はつといふ。やけど、かえでちゃんにはそれがあらへん……」

それが一番心配であつた。もちろんこいつやつて一緒にいる間は良いかも知れない。しかし、もしもの事があつた時、自らそれを回避する為に動く事が出来るであろうか？

「かえでちゃんが望んだ事です。勿論危険が迫つたら、それに対して僕達が何とかしないといけませんね。あ、もちろんその役は叶に一任しますね？」

朔夜は面白おかしく叶に言葉を放つ。ただ朔夜は叶の表情を見て樂しみたかったのである。それに対し叶はあんぐりとした口をすぐへの字に曲げる。いつも、いつも叶にそのお鉢は回つて来る。

でもこうなった以上は、是が非でも守り通さなければ叶は思い直つたのであつた。

狭いようで広いこの富島は富島桟橋から徒歩で十分程度で厳島神社に着く。そして観光名所で特に見知られる大鳥居は背後にある海の青の中で映える朱色を鮮やかに優美に立つていた。もしこの雨が無ければもつと美しい景観であろうとそう感じる。

時代は推古天皇の時代まで遡る。当時は祭神、天照大御神の娘、市杵島姫命と田心姫命、湍津姫命の三神が敬われ奉られ始めた。そして、平安時代末期、平清盛の口添えで厳島神社を造営。それに着手した訳としては、『平家物語』で語り継がれている。高野山に参拝した折り、靈夢を感じ夢の中に現れた老僧の勧めであつたと云われている。

そして、四人はそんな歴史深い神社内を散策しお参りをする事にした。まずは、祓殿、拝獻、弊殺、本殿と順に歩いて回ることになる。

この神社は、海上安全。商売繁盛で有名で、余り叶達には関係はないが、お参りをする際念じる事はみんな決まつていた。しかしその途中、叶は気を張つてアンテナを張り巡らせながら歩いていても、次に搜している五行の陰陽師を見つける事は出来ずについた。

その後、今日のこの天候で観光客の少ない水面に近いその場所へと足を運ぶことにした。

いつしか満潮時から干潮時へと時が流れ、楠の四脚造の大鳥居が下から覗く事ができる迄潮は引いていた。そして、うつとうしい雨は小振りではあるが未だシットシットと降つていて。

そんな中、その引いた潮の先に身汚い一瞬見て新宿に蔓延るホームレスのような色合いの、元は白い羽織だつたであろう服と、槌せた紺の袴を履いた子供が叶の田の端に映つた。

歳の頃は、背の高さや体つきから推測するに小学6年生くらいで

は無かるうか？水城をほんの少しだけ大きくした体型である。その上、目に止まるに値出来たのは、後ろ姿だけ見ると、外国人では無かるうかとさえ思える程、色素の薄い白銀髪の少しウエーブの掛かつた一見軽い感じの腰まで伸びた髪が印象的な少女の様な者がそこに立っていた。

この厳島神社の関係者としてみる事もできるが、それにしても余りにも薄汚れた見た目。そしてその姿に何かしら悲壮感が漂つてゐるようでどう云う訳か見逃せないと想い、その子供の後ろ姿に叶は目を見張った。

「なあ、あの子、独りやけど……こんな所で何しとるんやろ？」「見ても観光客つちゅう感じやないで……地元の子やろか？」

叶が突然周りの一行に注意を促した時、その子供は、海面へと足を運び始めたのである。

「え？」

まるで、水に弾かれたかのように海面を歩き始める。押し寄せる波をものともしないで……そして、この雨の富島にじこく自然に溶け込むかのように薄らとその姿が消え掛かかっている。それを一行が目にした時、

「あ、あの人！」

水城はその子供の過去を自ら受け入れ偏頭痛をもよおしていた。水城の頭に流れ込んで来たその風景は、平安時代の悪霊退治や、戦国時代の戦風景。そして、原爆の火の海のフラッシュバック。全てが脳裏を過りパニックに陥りそつた程の眩暈が押し寄せていた。フラリとよろめくその水城の身体に気付き驚いてかえでは抱きとめる。

「止めな！……ちゅうより、どうなつてんねん？」

朔夜を振り返つて、どうすれば良いのか意見を求めた。こんな事があり得るのは、靈としか考えられないが叶のアンテナに靈としての氣は感じられなかつた。いつもの胃を突かれるような吐き気が起こらない。本来靈に対しても敏感では有る叶である為その子供が生身の人間だとそう悟つた。後、こんな事をなし得るのは……自らが

捜している陰陽師くらいではなかろうか？

「呼び止めましょう」

朔夜は慌てて叶を見上げる。叶は、今迄海水の下であった砂の上に足を走り始める。その後を叶達は今迄海水の下であった砂の上に足をとられながら追い掛け始めた。現時点誰だか分からぬその人物を

……

「ちょい待ち！あんさん、どうするつもりやねん！」

駆け出した四人の中で、体力的に優位に立つ叶。一番乗りで辿り着いたその先の子供は、もう全身半透明で薄らとしか見えない。そしてその子供が振り返った時、あまり自信は無いが、少年である事に気が付いた。しかし、叶が投げかけた言葉に振り向くと、その少年は不思議そうに叶を見上げた。

「何じやろつ？」

少し怪訝そうに叶を見上げるその表情に、叶はこの状況下あり得ない事は分かつてはいるものの、

「……入水自殺でもするんかと思うたで？」

しかしその少年は、叶の言葉を受け取らず、
「そうけえ？まずい所を見られてしもつたけえ……記憶を消させてもらわないとけませんなあ……」

一方的に少年は叶の目の前に手を翳し暗示を掛け始めようとす
る。しかし、

「あんさん、陰陽師やろ？五行を操る！」

直球のその言葉に、少年は色素の薄い大きな瞳を見開いた。するとたちまち消え掛かっていたその姿が露になる。

「あなたは何者です？」

その瞬間、叶はしつかりとその少年の手首を引っつかんで止まらせた。そして驚きのあまりこの冬真近の冷たい海の水に脚半分浸かっている事も忘れていた。しかし、当のその少年は海面に軽々と浮いている。その様子を遠巻きで朔夜、かえで、意識を取り戻した水

城は見守っていた。

「あんさんを捜しどつた者や！俺は、塚原叶つちゅねん。あんさんと同じ陰陽師や……あんさんの名は？」

「名前はとおに忘れたけえ……」

「忘れた？記憶喪失かいな？」

「長い事前の話やけえ……覚えとらん

「長い事つて……あんさん幾つや！」

その答えを云う事無く、この状態を他の者に見せる訳にはいかないと思つたのか、その少年は陸地へと一瞬弛んだ叶の手を振り切り歩き始める。その後を叶達はパタパタとその少年を追い掛ける事になつたのであつた。

「」の少年の話は、厳島神社を彩るに相応しい新緑の山、弥山で行われる事となつた。弥山と云えば、一九九六年に厳身神社と共に世界遺産として名乗りを上げた山である。この時期は雨さえ降つていなければもつと良い風景を拝めるであろう。そんな原生林で覆われた弥山は古くから神体山として信仰厚く、山頂付近には謎めいた奇岩が点在している。そして、その弥山の展望台へとその少年の指示でロープウェーに乗り込み五人はさらに移動し始めた。

「お兄ちゃん……」の、ただ者じゃないわよ……」

ロープウェイに乗つたとたん、子供モードに戻つた水城は肩をガタガタと震わせながらボソリと呟く。その姿はまるで、車のライトを真つ向に浴び立ちすくむ猫のようにも感じられた。どうやら先程感じた少年からの過去のイメージが余りにも悲惨で悲しい物であつたから……それがどうしても頭から離れなかつたらしい。

「どういうこつちや？」

心拍数が異常じや無いかと思える程、胸の鼓動が止まらないのか、

水城は青ざめた表情で叶に呟く。

「少なくとも、千年は生きてる……」

過去が見える水城にとつてこの少年の過去はそれほど凄まじいのであるつ……しかし、問題のその少年は無口なのか？何を考えているのか？全く一言も話さない。

そんな中、まだ何も知らない四人と一人は静まり返りつっていた。その後ロープウェイから下りた一行は黙々と人けが少ないのであるつ場所を目指した。そして、その場所に五人は腰を下した。

「さて、ここ迄来たんや、どう云う事が話してもらおうやないの！」叶は、雨宿りができる五人が座れそうな場所を見つけて話を切り出した。

「名前を忘れたとはどう云つ事です？」

相反して、朔夜は落ち着いた口調で、叶のよくなじみた言葉を和らげた。相手は何はともあれ見た目は少年だ。

「私は、この安芸で生まれ育ったのですが、今は広島と云うのでしたか。もともとは本土で生まれ育ちましたが、時が経つに連れ、宮島に移り住みました。さて……どれだけ生きたか知れません。千年は経っているでしょうが……色々な名前をその時その時に合わせ名乗つて来ましたゆえ……それから、私はこの姿を雜持している訳では有りません。ある事情で死ねない上に、成長が止まりましたままであります……」

少年は、長い年月を生きて来た憂いか、この弥山の頂きから眼下を見渡す。そして、少し寂しそうに笑つた。標準語を話そうと努力している風では有るが、所々広島弁が耳に残る。そして少年は続ける。

「この地の洞窟というのでしきうか、人の出入りが無い冰室に眠っている伝説のミズチと私のこの体質に関係が有る事だけは確かなのです。そのミズチの眠りを引き起こし、そしてその魂を自らの精神に宿す事でその時初めてこの後の私の成長が始まる。それが私の現状と云う訳です……」

ミズチとは、想像上の生き物とされており、一般には大蛇とも水

中に往む竜の一種、足は四つ、頭に角が一本あるとも言われている。

朔夜は、自ら持ち運んでいるノートパソコンを徐に開くとその意味を調べた。そして、その画面を興味深く少年を除く四人は覗き込む。

漢字では鮫（蛇に似て四脚を持ち毒氣を吐いて人に害する）蛟（水中に住む竜の一種。蛇に似て四足あり大きい物は人をも飲み込む）他、（黄色い竜。また角の無い竜。伝説上の猛獸の一種。虎に似て鱗がある）（竜の子で、二つの角があると云う想像上の動物。また、角の無い竜）（想像上の動物で、竜の類）など五種類があげられていた。

これらは同じミズチと呼ばれるものでも、形状が似通つてたり似通つて無かつたり色々である。それを連想するには太古の人達の想像力を頭に叩き込む事も難しい。とにかく伝説を語り続ける事を信じるのは困難な訳である。

そんな生き物にまつわる話に出くわすとは思つて無かつた為、叶達は意外な表情でその話に耳を傾けた。とにかく、内容を把握する程頭がこなれては無かつた訳である。

そして、一通りの話が終わり、叶達一行は呆然とした。一番心に残つたのは、どれほどの歳月が彼をここ迄この地に押し止まらせたのであろうか？と云う事であつた。色々な出来事が有つたはずだ。それに名前も思い出せない程色んな名前を名乗つて來たと云う事は、出会いも別れも数え切れない程であろう。老いをそれ程実感して來た訳では無い若さに満ちあふれた叶達にはその壯絶な一生をどう把握して良いのか分からぬが、死を恐れる必要が無いなんて、羨ましいなあ……とかそう云う類いを口走る事などこの少年の前では決して出来ない。それほど強烈な印象を少年に抱いてしまつたのである。

そんな中、おかしな点が有る事に朔夜は気付いた。以前、叶に陰陽師は夢に介入する事ができると聞かされた。そして、宮古島でのハイジャック事件では水城が見事に記憶階層に介入する事までも成

し遂げている。それらを鑑みるに、この陰陽師として生きて来た少年に出来ないはずは無い。それならばその伝説のミズチを探し出せていないのか？いや、場所を知っているから、それは無い。ならば、ミズチは人間と違うからその手段を取る事が出来ず上手く事に及ばないのか……だから、

「ところで、そのお話のミズチは探し出せたのですか？」

静かな口調で朔夜はこの名を忘れた少年に問いかける。

「勿論搜せ出します。この先の滝が在るその奥に洞窟があるんじやけど……封印されたままで……私の力ではどうする事も出来ませんゆえ……やけえ……実は待っていたのですよ。占夢ができる本物の占夢者人を。そして、感じたんじやよ。本土にその占夢者が来ている事を」

その話に、

「それって、もしかして朔夜の事なんとちゃうか？」

叶は勢いに任せて身を乗り出し少年に問いかけた。『本物』と云うのはどこまでをそう云うのか当の朔夜は分らないが、陰陽師とはまた異なったものなのかも知れない？ふと考えが巡った。

「どうじやろか？私にそんな未来を予測する力はないものですが

……ただ、いつかは分からないが必ず現れるとは言わせてました。

私が産まれ落ちたその後にこの現象を察知した両親の元、ある占い師に……」

五行の者探しのハズのこの旅。しかし五行の話は既に忘れ去つていた。今はただこの少年の話に全ての者が耳を傾け聞き入っている。何とかしてあげたいと云う思いの方が強かつたのかもしれない。

「ふうん。なら、試しにその洞窟に行つてみれば良いじゃない？朔夜ちゃん。力になつてみても良い事だと思うよ？」

全ての内容を口を挟まず静かに聴いていたかえでが提案する。自ら力になれないが、こういう者を放つておける程かえでは冷たくは無い。逆に口を挟んで来るのがかえでの性分とも云える。つまりお人好しの世話好きなのであるづ。

「簡単に云いますが、かえでちゃん……僕にその力が有るかは行つて確かめなければならないのですよ？」

朔夜自身、そのミズチを起す事ができるかなど分からない。力になつてあげられるのであれば、いくらでもなつてあげたい。しかし、全てはその場に行つてからの話ではある。だから、

「案内して下さいますか？そのミズチがいるという場所へ……」

その言葉に、叶は元気に言い放つ。

「要は、出たとこ勝負や！」

そしてそれを合図に、黙つて立ち上がつた少年を先頭として五人はその場を立ち去り始めたのである。

#3 忘れられた過去

忘れられた過去

時は平安、名を忘れた少年は平和なこの安芸の地で生まれ育った。そして今、興味津々と母屋の裏の木陰で積み重ねられた書物にじっくり目を通していた。

「おかしい事もあるんじやなあ～あの子は全く成長せん。しかもあの姿じゃ。これから先苦労する事じゃうのハ……」

年老いて子を授かつたこの少年の父はその少年の容貌に引きずられる事無く、愛情深く育てて来た。がしかし、成人するハズの歳のソノ子供を不安げに庭先から眺めていた。

安芸本土のその家は、京からの按察使（地方行政の監督官）として設置された令外官としてこの安芸に代々永きに渡り赴任していた為、そこそこ裕福でもある。

「ほんじやあ、このままにしておく事も出来んじやろ？一度あの村はずれの有名な占い婆にみてもらおうじやないかね？」

ついに言葉にして心配し始めた父の不安を受け止めたのか、母は少し考えたかのように父に切り出した。そうしなければ、この先おちおちと少年を外に出し歩かせる事も出来ない。

こうしてその話をまとめる父、母の意向をのみさつそく次の日その少年を村はずれ迄連れて赴く事に考えが到つたのであった。

訪れたその家は農家を営んでいた傍ら、占いをしてくれる。ここ安芸では名を知らない者は無かつた。それだけ有名で、しばしばここを訪れる者は数限り無い。そんな行列が出来る占い屋敷は今日も朝早くから人だかりが出来ていた。その最後列に、少年を連れた両親に並び順番を待つ。そして、暮れ前迄掛かった頃順番がやつて来た。

少年は何故こんな場所に自分を連れて来たのか？だいたい察しが付いていた。成長しない自分。そして他人と容貌が異なっている自分。今迄コノ自分を不思議に思っていた。何故こんな風に生まれついたのか？その謎に迫れると想つた。

物心付いた時に感じた意志。両親は愛を注いで育ってくれた事は覚えている。しかしだからと云つて素直に子供らしく振る舞う事が出来なかつた。そうしてはいけないのではと思つていた。だから一度なりと自分の本心を打ち明けた事はなかつた。そして、聞き分けの良い子供を演じてきた。だから今この場所でも平常心を装いただ黙つて両親の側に立つてゐる。そして敷居を跨いだ。

占い婆は、一田少年を見るなり目を丸くした。

「ここの子を占つのじやろ？」

倭人ばなれしたその少年を訝しげに見詰めてはいたが、自分の仕事をおろそかにする気はさらさら無いらしい。

それから亀トを直ぐさま始めた。

亀トとは亀の甲らを火であぶりその割れ方を見て占つと云つて、中國古来の占いで日本には5世紀頃伝わつたとされている。そして、こつ言つた類いの占いをする者は、律令政治の官職として神祓に仕える専門職としても名高い。特に有名なのが、伊亘・壱岐・対馬のト部氏から選ばれる事が多かつたが、密かにその才を持ちこの地で嘗んでいる者もいたのである。

「この子は、ミズチに依る恩恵を被つてこるようじやのう……」

割れた甲羅を見て判断した占い婆は何の驚きの表情を見せず輕く流した。

「ミズチ？」

「そうじやのう……架空の生き物とされどるが、實際いるのかもしれんけえ……捜がしてみてみるのも一考かもしれん」

「では、ここの子が成長せんのもその恩恵に預かつてゐると言う事じやろか？それにこの姿。何かしらある事はわかつとるんじやが……」

…どうすれば一番ええんじやろ?」

父親はその横で話を聞いているのかいないのか?ビクリとも動かず黙つて座つてている少年を見て問いかけた。

少年は、決して話を聞いていない訳ではなかつた。ただ、眞実を知る上にこには静かに黙つてているのが得策だとそう想つていたのである。どこまでも冷静沈着だつた。

「山城の平安京は今悪靈が蔓延つとる。もしかしたら、こん子は陰陽師の力をも宿してゐんじや無かるうか?こいついう時代じやからのう。不思議じやあるまい?一度平安京の地に足を運ばせてみる事をお勧めするんじやがどうじやろ?」

確かに今の世、悪靈が京の都を占拠せんとし蔓延つてゐる事は離れてゐるこに安芸でも噂には聴いてゐる。

しかしその言葉を聞いた両親は複雑な顔をした。何しろ大事な一人息子であり後継者でもある。そんな所へこの子を上京させて何か有つたなら、とんでもないと思つた。もちろん、母親も同様であつた。

「他に方法は無いのじやろか?」

「息子が可愛いと感じるのは当然じやが、一番良いのは手放してみる事じや……あと、恩恵を預かつてゐる場合、こん子に死は無いとおぼしめせ」

「死が無いとはどう言つ事じやろか?」

母親はすぐに問いかけた。納得の行かない説明の上こんな占い結果では追求する必要が有つた。

「ミズチにも色々有るが、基本的には水を同る龍紳じや。占いによれば癒しの力を秘めておる相が出でておる。その恩恵を受けているとなると成長せんこん子はこのままこの姿を保ちつつ生き永らえる事となるじやうつて。言つなれば、不死の力を手に入れておると云つ事じや」

不死の力?両親はその言葉が胸に深く突き刺さつた。何故この子がそんな運命の下に生まれてしまつたのか?神を疎みたいとさえ思

つた。

「あと、占いにこいつ出とるんじゃが何千年と云う時を経て、こん子の前に真の占夢者人が現れるじゃらう。それが転機となり、こん子の成長は成し得る。この占いを信じるかどうかはこん子の生き方次第じゃな……」

とにかく、少年は老いを感じる事無く死ぬ事すら出来ない。そして、陰陽師として平安京へと一時派遣して再びこの安芸に戻つて来る事が運命付けられていると云う事らしい。それはまだ先の時を経て後の事となる。

少年は、後ろ髪をひかれる思いで今迄お世話になつた両親の元から立ち去つた。全て話し合いは事なく進んだが、実際は離れたいとは思わなかつた。ただ、自分の運命がどうなつてゐるのか？その事に興味を持つた。その為、安芸の地を去り、平安京へと旅立つたのである。

平安京の悪霊退治は、かの有名な安倍清明の陰陽師達との出会いで一戦を交える事となつた。この頃の陰陽師は、どちらかと言つて呪禁師と言つた方が正しいかも知れない。それがいつしか、一般的に陰陽師と名乗られるようになつた。

この少年は、その補佐を担当し四六時中気を張つておかなければならなかつた。何しろ、陰陽師としての働きは初めての経験で、一から十迄教えてもらわなければならぬと言つ困難きわまりない事であつた。コツを掴み術がどう云うモノであるのか把握し吸収する能力はずば抜けてはいたが、それでも始めは苦労した。

「この子はよく働く子ですなあ～」

一心不乱に仕事を片付けて行く少年を、不思議と思う事無く周りの貴族達は評価して行く。その評価が自分に跳ね返つてくる事は何より嬉しかつた。そしてそれが自らの生きている証であると少年は自負していた。そうで無ければ存在価値を見い出す事が出来なかつ

たのである。

時々、何の為に生まれてきたのか？その疑問が沸き起る度に言い聞かせておく。そつする事で自らの氣持ちに整理が付いたのである。

しかしつしか時は流れ、この平安京に蔓延っていた悪霊も消え失せた頃少年は、陰陽師という役所を退き平安京を後にする時が来た。どうせならこのままこの地でこれからも自らの力を發揮させて生き長らえるのも良いかもとは思つていたが、何しろ自らの命が死きる事は無い。それに自らの成長と関係するマジック探しをなし得てはいない。それが頭を駆け巡った。

つまり、これから先の自らの身の振り方。そして居心地の悪さがその内自らの心に病むのでは無かるうかと云つ恐怖が沸き起つて来始めた訳である。よつて、少年は時期を見て、静かに周りに悟られる事無く華やかな平安京を後にし安芸に自らの住居を移したのであつた。

安芸に身を寄せ、両親の元に戻りうとした少年ではあつたが、そこにはもう自らを育ててくれた両親は不運にも死してこの世の者ではなかつた。始めのうち少年は、途方に暮れる日々を過ごした。とにかく、平安京での報酬は有り余るくらいあり、普通の生活をする事が出来ない訳では無かつた。しかし、今迄この地で代々続いた巡察使の仕事をする事は出来ずについた。知識が無い訳では無いが、生まれ育つたその土地の様子が急変し尽くし、もう自分を今迄通り表に出す事は難しい。その為自らの目的を違う面で生かす事にしたのである。この地で不死の陰陽師または呪禁師として周りの人間に救いの手を差し伸べる事に全力を尽くす事にした訳である。

薬を作つたり、悪霊払いをしたり、占いをしたり。できる限りこの地の者達の為になる事をしようと思つた。そうこうしていつしか時は流れて行く中、そうする事で安芸での自分の存在価値を上手く身に付けて行く事が出来るようになつた。それからと云つもの多く

くの人が家に訪れる。ある意味信者が増えて来て少年を訝しげに見る者も少なくなり、逆に神のようにならぬ者も少なくなった。

それを好ましいと思う暇も無く少年は必死で事に従事した。そうする事で今の自分を支える事は上手く出来た。この頃は良い時代であつた。長きの時代を生き永らえたその過去を振り返りそう実感していたのである。

しかし、やはり時代は変わつて行く。今迄子供であつた者達は、老人になり死を迎える。何もかも自分の前から人は消え去つて行く。それを何度も無く見守つて行く内に、少年は一時山ごもりを始めることにした。

この世は鎌倉時代、室町時代、戦国時代へと流れて行く。戦火が起る度に身を預ける所は無くなつて行く。至る所で名前を何度もとなく返えることにした。

今の世は戦国時代。荒野に悲惨な戦の後が残されている。山から降りてその有様を見る度に心が痛んだ。

この頃少年は、薬売りで生計を立てた。どんなに陰陽師の癒しの力を使おうとも、ただ虚しい結果しか生まない。それに戦で死んで行く者を生き返らせる力など無い。それならば、気休めでも薬売りをしていた方が何事にも勝る事ではないかと少年は考えを巡らせた。それは正しい判断だったのか?その事に関しては、余り自信は無かつた。が、それしかもう手は無かつた。

後は、戦を退ける為の結界を張る事くらいである。その頃の安芸は毛利氏の配下に治められていた。が、最終的に戦の世を統治したのは歴史にも名高い徳川家であつた。参勤交代、武士の時代。

少年はそんな時代で他人に悟られないように色々な地を彷徨いながら自らを奮い立たせ、時代に乗り遅れないように勉強を重ねながらあちこちを見聞した。因みに、その頃には自らの姿を消す術を身に付ける事が出来るようになつていた。そうする事で何とか、言い訳できない対応に迫られた時都合が良かつた。もちろん、普通に生

括する際は、再び幾度となく名前を変えながらこの世を生き抜いていた。

そして、ペリー来航、徳川家の衰退。尊王攘夷運動。時代は鎖国を撃ち破った亞米利加の動向で変わつて行く。それは、明治と言う幕開けであった。

武士の時代から、商人の時代。外国様式に人々の眼装は変わつて行く。しかし、少年はその時代の流れを見守るしかなかつた。どうしてもその時代の流れに意識を入れ変える事が出来ない。それがこの少年の柔軟な考えが出来ない短所でもあつた。

自分が存在して良いのか？そんな考えが頭を過る。もうどれだけ生きたいのか？ただただ疲れきつた身体。しかし、少年は死ぬ事が許されない。そんな状況を回避する為に、本格的に自らの足でミズチ搜しを始める事にした。

ミズチ搜しは、困難きわまりない宛て所も無い旅である。誰にもこの事を悟られる訳には行かない。廃藩置県で安芸は広島と呼ばれるようになつた。初めは慣れなかつたが、時が経つにつれ何となしに受け入れる事が出来た。しかしその広島の一體何処に？放浪しながら少年はただ一人の身で放浪した。まずは本土。

時代は、第二回世界大戦まつただ中になる。もう完全に何が起こつているのか分からぬ状況下であつた。空を飛ぶ飛行機と言う物を目の当たりにした時の驚きは目を見開き空を仰いだものだつた。

そして、運命の歯車はここ広島を襲つた。有名な広島原爆投下である。

丁度その時たまたま少年はその投下現場に居合わせていた。突然光が目に焼き付いた。そしていきなりの火の海。放射能汚染。周りの建物を吹き飛ばす爆風。何もかもが一瞬にして消え去つた突然の異変。何が起こつたか全く分からなかつた。訊ねようにも周りの者達を飲み込んだその事象は死ぬ事の出来ない少年を避けてただ独りその場所に取り残された。

少年は走った。黒々とした鉄筋の柱。何処もかしこも見るも無惨なこの有様。崩れ落ちそして消え去った建物をかいくぐりながら、無我夢中で少年は息も継がずにひたすら走った。誰か？自分以外の誰でも良いからと言う想いで走り抜けた。世界が無くなつたのかとさえ想つた。何が起こつたのか分からぬ。だけど、最悪な事態がこの地に降り掛かった事だけは、間違い無く事実だ。そして、川岸に立つた。目も当たられないくらいの焼けこげた人の山が……水を求めて這いする人を目の当たりにし、膝がガクンと落ちた。全て悪い夢だとそう思ひたかった。考えられない程の衝撃が少年を襲つた。吐き気と何かをしないといけないと思う心が少年を動かした。どうすれば良い？この状況下、自分が出来る事を考えた。

そして、その黒焦げた、人だったその塊を……周りを見渡し、「浄化！界！」

言い放つた。念を込め腕を広げ、自らが守護出来るだけの範囲に癒しの呪文と結界を張つた。蠢くモノ達が静かに呻き声を落とす。少年は瞬時に駆け出し、出来る範囲の行動に出る。もう亡くなつてしまつている者もいたが、直ぐに判別を付けまだ息が有る者を一人一人回復させて行く。熱傷は体全体を覆い、はつきり言つて手の施し等出来はしない事くらい見れば分かつた。が、それでもこの状況をほつておく事は出来なかつた。

遠くで、近くで……癒しの呪文を裏切つて、人の最期の言葉が聞こえる。涙が頬を伝つて流れた。

悔しいと思う自分がその場にいた。救えない自分に苛立つた。何故こういう事が起きたのか？という事よりも、今この場にいる自分が、どうしてここにいるのか？という疑問が体中の血を沸騰させる勢いで流れた。そして心の中で蔑んだ。自分が生きている理由が……これまでの……そしてこの最悪な状況下を見る事なのかと言う事を、改めて思い知らされた気がした時、術が糸が切れたかのように途切れだ。すると、少年を取り巻く様に魂が浮遊して行くべき所に戻るべき場所に飛び立つて行くのが少年の目の端に映り込んだ。そ

してここには誰も生き残る者はいなかつたのである。

少年は、この場所から速やかに立ち去つた。もうこの場所にいたくは無かつた。去つてしまひたかつた。生きていたく無かつた。どうすればこの身体から魂を抜き出す事が出来るのか？神を呪いたかつた。死に場所を探す事等出来ない身。こんなちッぽけな何も出来ない者がどうしてこんな所にいなければならぬのか？そして、産まれ落ちてしまつたのか？何故自分はミズチを未だ見つけだせないのか？伝説の占夢者人はいつ現れるのか？

冷静になればなる程その事を考えてしまい何も考えないようにしようと心掛けるだけ逆に苛立たせた。今まで何千何万と云う人の死を見届けて來たが、今回は余りにも酷かつた。一瞬だつた。世界の動向がどうなつてゐるかもつと知つておくべきだつた。打つべき手を打つ事が出来たかも如れない？まさかそんな事が出来たとは思えない。未来が分かる力等無い。ただちつぽけな自分。そして立ち止まつた。微かに生きている小さな赤子の泣き声に気が付いたからであつた。

少年は、その泣き声を頬りに側の木の根元で泣いているその子を取り上げた。母親はその子を抱き締めていたのであらうが、黒焦げたその手から転げ落ちていた。少年はその子を取り上げあやすように、腕の中の温もりが嘘のようだつた。その赤子は、少年のその腕に抱かれたと分かつたとたん、泣き止心だ。まるで、母親の胸に抱かれているかと思つたかのように。

そして、静かに眠りに就く。少年は、どうするべきか？悩んだが、両親と思われる人物はこの世を去つてゐる。孤児となつた訳だ。

まるで写し鏡で今の自分を見ているようだつた。別に境遇を言つてゐる訳では無い。しかしそう感じた。この世に頼れる者が無い。

そう云う意味である。育てるべきであろうか？そう考へると、何故か笑いが込み上げた。この子は育つて行く。いつしか自分の背を追いこし、そして、死を迎える。もう、見たくなぞ無い。でもこのま

まこの場に捨て、自然淘汰として死を導くのか？まるで神のように見放す事が出来るのか？出来るはずなど無い……そう確信した時、少年はその赤子を連れてその場を去つたのである。

神は加護する者を導いた。そして、運命の輪は回つた。少年はその後その事に気が付いた。それは、その子が成長し、言葉を喋る事が出来るようになった時の事だった。

「ねえ、おにいちゃん？」

その子は五歳になつた。名前は新山潤と言つた。少年が付けた名前である。

「ぼく、まちにおりたいんじゃけビえーじゃうか？」

その時、少年は、あの惨事が起こつて少しづつ平和な世が訪れたそんな時に山に引きこもりつた。色々大変な日々。子供を育てる事の大変さを初めて知つた。そしていつしか本当の弟のように思い込む事がしばしばあつた。しかし、周りにこの潤に見合う友人もいないうやうむ山奥に引きこもつた。なるべく自分の身を隠していたかつた。そしてもうミズチの事等頭に無かつた時の事であつた。

「山を下りたいのか？また何でじやろか？」

判りきつていた事に頭を悩ませた。この子を育てるには、まだまだ時間を要する。人に会いに行きたいと言い出したら面倒だ。でも、もしかしたら、この子の親戚を捜し出す事はできるかも知れない。そして手放す事も……

この潤があの身に付けていた物の中に住所を記していた物と名前が有つた。本名は、田中克行。その事は潤には敢えて話していなかつた。ただジツとその事を隠し通していたかつた。なるべく身近に感じていたかつた。それが自分の只の自己満足だとしてもだ。

でも、潤はその事を知らない。自分が考えている事など気にもしていない。だけどこのままにしておく事もできない。自分を追い越す事が出来る背丈になつた時、きっと潤は訝しがるであろう……その時の事を考えると、少年は胸を嫡まれる感覚を味合つてゐる。

だから、少年は潤を連れて、山を下りた。手放さなければならぬ時が来たのかも知れないと心が痛んだ。

山下はもう復興を始めていた。もちろん、完全とは言えない。だけど第二次大戦が終わり、倭の国……日本が戦争に負けたと云う情報だけは頭に入っていた。

「おにいちゃん、まちにでるの？ ぼくうれしい！ あのねあのね、いろんなひどがいるんだよね？」

少年は、喜び勇んでいる潤に微笑みながら、でもその心の裏では少し寂しい思いだった。

少年はあの時、潤が身に纏っていた物とお守りを隠し持つておんぶし街を歩く。そして、住所を頼りにその場所だつた所へと向つた。歩く事には慣れている。足腰は鍛えているから。そして、住所の場所を訪れる事が出来た。家は建て直されたのか？あの惨事を物語るモノはそこには無かつた。

恐る恐る、その玄関の戸を叩く。すると、一人の少女が現れた。

「なんじやろ？ どちらさん？」

少年の時代錯誤な服装と、容貌に一瞬目をこらしたが、背中におぶつている潤を見て少し心を押し沈めたらしい。潤はとつと長旅の為にか、眠つている。だからわざわざ起す事もあるまいと少年は事の次第を伝えた。

少女は驚いたように目を少年と潤に向けた。

「お父さん！ 克行が生きとつたんじや。早う来て！」

少女は、嬉しさの余りに大声で喚いた。それが凄く少年の心を痛めた。潤は自分の元から去つて行くのだとはつきりと感じたから。でもその方が潤にとつて幸せな事かも知れない……

少女の言葉を聞き付けた父親は、嘘しさの余り飛び出して來た。その父に、少年は潤の身元となる物を差し出した。

「確かにこの子は克行じやが！」

少女と父親は喜び勇んだ。これ以上嬉しい事が無いとでも言いた

げなそんな表情であつた。

「どうぞお上がり下さいな」

少女は、少年にこんな玄関先で話をする訳には行かない、そう思つて進めたが、少年はそれを断つた。これ以上ここにいたら自らの素性を話さなければならぬ。こんな時代にこの少年の言葉を信じる事が出来る者はいないであろう。それに、潤が眠つている間に何とかしたかった。起きて、潤が兄だと思つて過ごして来た時間を思い出して泣き出してもしたら、事は重大だつたから。

「すみません、そう云う時間は私には無いものですから……このまま失礼したいと思います。今この子は良く眠つてます。その間に私は去りたいと思います……」

その言葉に、潤の父親は、

「では名前だけでも……後でお札に行きたく思つとるんじゃが？」

少年は、心の底がチクチクと痛んだ。この痛みを癒す方法をなど無い。そう想うと、

「いえ、結構ですよ。名乗る名等私にはありませんし……それでは失礼します」

少年は、潤をその場に預けると同時に玄関から駆け出した。忘れない、その想いがドンドン心に広がつた。この二年間全てを、忘れない！ いつになつたら終わるんだ？ こんな事をいつ迄続ければ良いんだ！ 少年は自暴自棄になつていた。全ての事が呪わしく感じられた。恨めしい。行き交う活気を取り戻して乗た人々。そしてこの街。そう考へていて自分に気付き大声で笑つた。行き交う人々は少年を振り返りそして何事も無かつたかのような顔で行き過ぎる。他人にとつたらこの少年の存在は只の日常にある気が触れたそんな者に感じられたのも知れない。少年は、身を隠すように路地を曲がつた。そこは少し暗めの場所であつた。そして、一人の老女に出会つたのである。

「道に迷いなさつたのじゃ るう？」

そのお婆さんは頭からひつかぶつている薄ぎたない布をとつて少年の前に小柄な身体で塞いだ。少年は苛立つたよう、「何の事じやろ……」

と言ひ返す時に、驚くよつて田を見開いた。そこには立ちふさがつているそのお婆さんの顔に見覚えがあつたからであつた。

「もひ、ミズチは見つかつたかの？」

そう、そこにはいるはずもない、あの予言を伝えた古い婆であつた。

「あなたは……」

「私に見覚えがあるのじやな？あり得ん事じや」

老婆は一タリと笑つた。

「ミズチは、こより南西に位置する所に封印されるとんじや。行つてみるのも一考じやと私は思つたよ？」

「南西？しかし、この安芸……いや、広島は調べたはずじやが……？」

「富島に行つたかの？ほれ、この先の船から行ける神秘的な所じやわい」

老婆はケタケタ笑いをやめない。

「いえ。でも、何故そんな事を私に言つたじやうか？一体あなたは何を隠しているんじや？」

少年は、詰め掛けるように言葉を零した。

「なあ～に？私はそなたの味方じや。いや？そつかどうかも怪しいのう？予言を貫く事は私の仕事。心迷つたそなたにそれを導くのが使命なのじや……何。忘れようがどうしようが、関係ないと言えば無いのじやが、そなたは忘れてしまつてゐるじやう？時はジワジワと……そして、ゆつくりと進んだるんじや。今すぐことは言わん。でもな、お主は富島に行けば良い。それだけを伝えたかつた訳じや」

占い老婆は、クルリと身を翻し、路地奥へと進んで行つた。

少年にはまだ聞かなければならない事があると云つ勢いでその老婆を追いかけたが、その腕を引っ張り振り向かせた時、それが今話

をしていた老婆では無い事に気が付いた。小柄な女性は訝しげに少年を見た。

「すみません、人を間違えました」

と引き下がる事で、その女性はイソイソと去つて行つた。こうして、少年は占い婆の言つ通り宮島へと足を向けることとなつたのである。

ミズチ

時間は刻々と過ぎて行く。富島の空は、雨であるにもかかわらずだんだんと陽が暮れて行き、今では今何処を歩いているのか分からぬ程迄暗くなっていた。天空には星も月も出ていない。光がない。そんな暗闇の中、一行は少年の後について行った。

「まだなんかい？疲れたで……」

叶は、はじめの内は疲れなどみせず、ズンズンと勢い良く地面を足で踏みならしながら歩いていた。しかし、目的の場所はかなり遠かつた。人を気にして少年が遠回りをしているのかも知れないと云うのにその事には気がついてないらしい。

そんな叶に、朔夜は後ろから思いつきり足を上げケリを入れた。その勢いで叶は思いつきり転げた。

「何すんねん！ 朔夜、このボケ！」

と立ち上がったは良いが、後ろを歩いている朔夜、かえで、水城はデリカシーの欠片もないと言いたげな顔をして叶を見ていた。今日は流石に何も言えなくて、しょんぼりと肩を落とす。

そんな時、

「もうそこで……」

道を駆け出した少年の後に続く。

そこは、滝のある場所であった。上から下に流れ落ちる水。勢いが良すぎて一瞬眩暈がしそうかくらいだ。しかし何処にも洞窟らしいものは見受けられない。

「何処なの？」

かえでは、分からかいわと云つた顔で少年を見下ろした。

「この滝の裏じゃ。気を付けて下せ……暗いですから。足下を踏み外さないように」

そう促すと、少年は滝の裏へと歩いて行く。でも、この暗さでは余りにも危ないと察した水城は近くにある木の枝をとり、

「点火！」

松明代わりにと、先をいく少年の後に続く三人に手渡した。そのおかげで何とか足場は確保した。

少年の言う通り、その先には大きな穴があつた。岩肌を深く抉つたたかのまうな穴。それが洞窟の入り口なのだと察しがついた。

「こんな所に隠されてるなんて……」

少年がどれだけこの宮島を散策したか知れない事を想うと、かえではいたたまれない気持ちが心を押さえ込んだ。

そして、一行は中に入った。

中は外気よりもヒンヤリとしていた。

氷室は、夏迄に氷を貯えておく為のものだと言う事は知っていたが、こうやって入る事は、初めてである。三人は興味と恐怖を感じながら歩を追めた。

そして、数十分進んだ所で足を止めた。

驚いた。氷が先を行くものを阻止するかのようにそそり立つっていたのである。

「氷？いや、これは……」

朔夜は、その壁に手を当てた。冷たくない。

「クリスタル？」

そう、それは紛れもなく氷ではなく水晶であつた。そして、その中を覗き込もうと、四人は少年の前に躍り出てよく中を見ようと松明を翳した。

「……！」

四人は凝視した。その奥には、巨大な、体長3メートル以上あるであろう、額に角を一本持つた白い虎の化身が身を丸くして眠りに就いていたのである。綺麗な鬣。そして、鋭い牙と爪。荒々しそうでどことなく品がある。

「白虎みたいだね……でも白虎は角なんてないけど……」

白虎とは、中国の伝説の生き物で、四方を守る内の、西を守護する生き物だ。そして、五行の元素の内、確か、金の属性を持つモノ。水城はその事を思い描き大きく田を開いて見上げていた。

「これが、ミズチ……」

田を見開いて、朔夜はこの生き物の眠りを醒ます事が出来るのであらうか？一瞬、考えてしまつた。出来ない……よつな氣がする……何だか途方に暮れそうになつた。

「本当に生きてるの？」

かえでは田をパチクリしながら、呟いた。生きてる事はすぐに判つた。ミズチの鼓動が辺りに反響していることは誰の耳にも聴こえているのだから。

「困りましたね……僕には……」

朔夜は否定の言葉を出さうとしていた。しかし、

「朔夜、やつてみんない！出来るかどうかは、その後で結果としてあらわれるんやから」

叶が、さつきの礼だと云うかのよう、朔夜の背中を叩いた。後押ししている。でも……何だか不安が押し寄せる。人間以外の占夢をした事がない。その上、これはどう考へても難しい……でも……そう。このミズチから眠りを取り除かないと少年はこのまま一生生き続けなければならない。迷つてる朔夜に、

「朔夜おじちゃん？」

水城が突然話しかけた。

「おじちゃんには出来るような気がするよ

今迄引きつづいていた頬を、満面一杯の笑顔で応えた。まるで、このミズチなるものを本気で起こせると言いたげに。

「どんな夢を見ているんですか？」

朔夜は恐る恐る、少年に問い合わせた。しかし少年の口から出た言葉は、

「私には分かりませんのじや……」

の一言であった。

「分からぬのですか？でも何かしら想い付く事があるのではありますか？」

その言葉に、

「一応試してみたんじゃが、扉は開かない……どう訳すか……よつて、どんな夢を見ているのかなど理解できないと云う訳じやのう……」

「試して、扉が開かれない？」

朔夜は困惑した。意味が分からなかつた。

「それだけ特別なんじゃうな？私はそう思つとるわけじやよ」

つまり、伝説の占夢者しかこのミズチの眠りは引き出されないと云う事だと改めて思い、朔夜は肩に重圧を感じた。

「チャレンジしてみます。ただし期待はしないで頃けませんでしょうか？僕には全くの未知の世界と言つて過言ではありませんので……」

咳くよつとして、朔夜はことに従事する事を承知した。

「では行つて来ます……」

意識をいつものように飛ばした。

十分な睡眠の上にこの行為。果たして上手く行くのか？ズシリと頭の中に何かが舞い降りたかのような重圧。そして、パタリと倒れ込んだのである。

邂逅

真っ暗だった。

扉など何処にも存在しない。少年の言葉を裏切るよう、朔夜は確実に夢の領域に入り込んだ。とそう思えた。しかし、何か違和感と云うものは感じていた。

自らはその真っ暗な夢の中で息を潜めていた。が、いつもならそろそろ夢の断片が見えて来るものなのに、全く映像は朔夜の目には映り込んではこなかつた。朔夜はその場を移動しようと、歩を進める。すると、後方にその足跡が銀色に浮き立つた。まるで、雪の上に足跡を残しているかのようなそんな気分だった。

一向に光は差し込んで来ない。

このミズチは本当に夢を見ているのかどうかも怪しく感じられた。何処迄も続く暗闇。朔夜は気が変になりそうだった。もう一日は過ぎているのではないかと思える程の時間の感覚。でも、一向に闇のベールで覆われた世界。そんな中をひたすら歩いた。

自ら進んできた道は、足跡として残されている。よつて、同じ所を彷徨つている訳ではなさうだと気付く。そして、また進む。すると一歩踏み出した時、突然一本の道が……というより、蠟燭が灯つた階段が露になつた。

朔夜は導かれるように、その階段を下りて行つた。何故だかその先に何が有るかを確かめなければとそう思わずには居られなかつた。カツーンカツーンと足音が響く。自らの足音だと理解する。この先には何が？螺旋上の階段を下りるたびに、朔夜の前にどんどんと蠟燭の灯りが灯つて行く。そして、その終着点に辿り着いた。

「扉？」

朔夜は、少年が言つていた扉の前に辿り着いたのである。頑丈そ

うな、でも幻想的な装飾が細かい扉が目の前に立ちはだかっていた。
「どうするべきなのでしょうか？」

朔夜は頭を捻った。

見た限り取つ手はない。ビルやつてこの中に入れば良いのか見当がつかなかつた。きっとこの先にミズチに関する夢が存在するのだろう事けは明白だつた。

朔夜は、そつとその扉に触れた。すると突然声が聴こえてきた。地の底から這い出て来るようなそんな声が。

「お主は誰じや？」

突然の事に朔夜は何も言えなかつた。

「誰じやと訊いとるんじや！」

恐ろしい程大きく太い声に朔夜は身を退けてしまい、戸惑つたが、

「都住……朔夜」

恐る恐る答えを返した。

「？」

しかし、その問い合わせに対する返事は返つて来なかつた。何を考えているのか？声の主は静かになつた。

「あの？答えたはずですが……僕は都住朔夜と言います……」

もう一度、朔夜は答える。すると、

「判つた。ここを通る事を許可する」

莊厳な扉は突然目の前から消え去つた。真つ白な光が朔夜の目の前に広がる。その中を見ようと身を乗り出した時、今迄有つたハズの階段が消えた。

「な？」

朔夜は一気に光の中に乗り出すように下降して行つたのである。勢い良く落下していく身体。光の先を見ようと懸命に目をこらすと、そこはまるで春のよつと陽気の空だつた。

「落としてますね……」

こんな時に悠長に考えていること自体おかしいのだが、朔夜は夢の中だとわかつてゐるから、そこ迄心配してなかつた。空氣に溶け

込めば良い。とのんきに考えていたが、それが適わないと判つた時……焦つた。より速く落下していく身体は空気抵抗などないみたいだ。

そして、雲を抜けた時、落下先がハツキリと目に焼き付いた。

「これは……現実！」

そう、夢ではない現実の世界だと悟つた。眼下には、桜の花が咲き乱れている。タンポポの綿毛が空中へと飛び始めている。森と草原と街と川と……現実だ……ただし、何故か中央に聳え立つているのは石煉瓦で作られた塔。そこだけが浮き上がって見える。そして別世界に迷い込んだと理解した。

朔夜はこのままではまずいと思った。もう後僅かで地面に叩き付けられる。もうダメだと思つた瞬間、目を閉じた。

すると、落下しているはずの身体が突然何かに触れた。ガクンと落下が空中で止まつたのである。

「何……？」

目を見開いて驚いた。竜神？が朔夜の身体を受け止めるかのように、大きな口で襟ぐちを支えたのである。そして軽々と背中に放り、朔衣はその背中に跨る事が出来たのであった。

こんな事があつて良いのだろうか？と、朔夜は意識をこの世界中へと走らせた。どう考へても、夢の世界じゃない。夢の世界でこんな風に何かに接触する事は出来無いし、してはいけない。だいたい、この竜神は何なんだろう？棚引く鬚と一本の角。その角をしつかり握りしめ、色々と考へるが答えは謎に包まれている。

背中の上から眼下をもつとよく見渡す。そして、空中を。すると今まで意識が行かなかつた事を目の当たりにした。竜神がそこかしこに飛び回つているのだ。

「ここは……竜神の世界ですかね……？」

ボソリと零した。

すると、朔夜を乗せ、再び上昇して行く竜神が、野太い声でガハ

ハハハと大声で笑つた。

「竜神か……人の子よ。」ミズチの世界じゃよ。」

「ミズチ……と申しますと?」

どう繕つても、洞窟にいたミズチとは似ても似つかない種類にしか見えない。朔夜はこの状況を把握できなかつた。

「お主を待つとつたんじやよ。良くなれてくれたのうー！」

しかし、朔夜の言葉を無視しこのミズチは話し続ける。

「儂の名は、ハームと言つんじやよ。この先この世界で何度も儂の事を思い出せ?名前を呼べばいつでもお主を迎えて来るからのうー」

そして、お決まりのようにガハハハハと雄叫びのような笑い声を発する。

このハームというミズチは、明らかに能天氣極まりないミズチのようだ。そのおかげで朔夜はホッと息を付くことができた。

「何処に行くのですか?」

朔夜を乗せたハームは、少し上昇気流に乗つて、かすかに舞い上がりつたが、

「その塔がある場所じゃー」

と言つと、今度は低空飛行になる。ヒョロヒョロとした胴体は、クネリながら空気の流れを読むように進んで行く。風がミズチの鬚をそして、朔夜の髪を撫で付けていった。

「塔?」

確かに、この地形の中央に聳え立つ塔は朔夜の目にも映つていた。しかし、その塔に何故向う必要が有るのか?その辺りに關しては全くこのハームは教えてはくれなかつた。無事、塔の元に下り立つた時も、ハームはただ、

「いつでも儂の名を呼ぶが良い」

とだけ言い残し、塔の中に入るよに朔夜を促した。ここから先は、ハームには立ち入れない聖地もあるかのようだ……

朔夜は、何メートルあるであろうかと考えさせられる大きな門をくぐり抜け、塔の内部に入り込んだ。中は空洞のように高い天井。そして、頑丈な石瓦で作り上げられた階段。その階段は、朔夜の身の丈よりは低いが、普通に踏み上る程は低くはない。そしてそれは螺旋状に積み重なっている。

とにかく道はこの一本しかない事に気が付き、朔夜はその階段らしき物を上つて行った。

どのくらい時間が掛かったであろう?もう汗だくでその階段の先にある扉を見つけた時には足と腕がガクガクと震えていた。

「どうやら……この奥ですね?」

朔夜はある意味この苦難の道に音を上げていたがやつと辿り着いたと言わんばかりに、何も声も掛けずに扉を押し開いた。そして、重く項丈なその扉が開かれた時、朔夜は呆然としたのである。

「長い占夢になつとるな~」

その頃の叶達は、朔夜が倒れてからずっとその様子を黙認するかのように見詰めていた。時間はもう夜中になつていて。しかし、これ程長くなると少しばかり心配になつてきていた。

「起こした方が良いのかしらねえ?」

かえでも心の中では心配しているようであった。こつやつて仕事に従事している朔夜を見た事はなかつたが、今の叶の言葉でやはり不安になつてているらしい。しかし、

「かえでお姉ちゃん?だからと言つてこの占夢を解こうなんて思わないでね?こういう状態の時起すと、副作用が起るから」
水城はかえでの心配は解るが、この状況を待つしかないと分かつていて。だからやんわりと氣をそがせようとした。

そして、この占夢を依頼した少年はと言えば、ただ黙つてその成りゆきを見守つている。あの扉の先にたどり着けたのかを思い巡らせながら……

朔夜が開け放つたその扉の向こうには、一体の竜神がいた。竜神と言つのか？取り敢えず、この塔迄導いてくれたそのミズチと同じ容貌の竜神。

中央に設置されている大きな一つのベッドに寄り沿つて、その一体は覆いかぶさるように顔を寄せあつていた。

しかし、朔夜の乱入でその一体は驚くようにその人間を見返つた。そして、

「人の子よ……いや、伝説の占夢者人よ……！」

片方のミズチは朔夜を見てドスドスと言つ足音を立てながら駆け寄つた。朔夜にはこの状況が理解できなかつたが、どうやらこの一体のミズチは今の今迄朔夜を待つていていたかのようである。

「いらっしゃい……」

もう一体が朔夜に促す。今、朔夜に近づこうとしていたミズチもハツと気が付いたのか、朔夜を導くかのようにベッドへと足を運んだ。そう、そのベッドに何かを大切に匿つているらしい事だけは理解した。

朔夜は、ベッドに眠つてゐるそのモノを覗き込んだ。するとその容貌は……今度こそ間違いなくあの水晶の壁に覆い隠されていたミズチなのだと理解した。

身体の大きさはあの場所にいた物よりもかなり小さい。両腕を広げたくらいの大きさ。しかしか無いことに気が付き、これはどう回事なのか？と目を丸くした。

「この子は私達の子供なのです」

「眠りを醒ます事が適わんのじや……」

先に言葉を発したのはどうやら母親で、その後に言葉を発したのは父親なのだと理解が何とかできた。

「伝説と言われましても……」

朔夜にはこの子供をどうすれば良いのか？それには答えられない。もしかしたら、このミズチを起こす為の占夢をしなければならないのかと一瞬考えたが、そんな事ができるのか解らなかつた。そこで、

考え込んでいた朝夜を見るにあたり、父親の方が口を開いた。

「この子の夢の中に入つてもらえないか？この子が僕らに似ても似つかん種族として生まれてから一度も目を醒まさない。でも、この事に僕らは介入する事は出来ないのじゃ。お札は何でもするからお願ひじや！」

懇願するその父親の態度に朝夜は戸惑つた。夢の中の現実の夢の中？

頭がこんがらかりそうになる。

「私達にはどうする事も出来ないのです！」

母親まで真剣に朝夜に懇願して来る。目に涙が宿っている事が解

り、朝夜は困った顔をしながら、

「そう言つ風に転がるか期待はしないで下さこね。とにかく、占夢は、人間と同じように行つても良いのでしょうか？」

取り敢えず、ここ迄来たからには何もせず帰る訳には行かない。ここ迄あり得ない事が積み重なつては、もひ、ある意味肝が座つてしまつたのかも知れなかつた。

「好きなように行つて下さつたんによろしことは思われますが……

私達が干渉する領域ではありますんし……」

その言葉を聴き、朝夜はいつたん深呼吸をすると、一一体のミズチに、

「解りました。では行つてみます。決して僕の眠りを妨げたりはしないで下さいね」

一言告げ、ベッドに横たわつてこるミズチの夢の中へと旅だつたのである。

取り違え

今度こそ夢の中だと……そう思いたかった。しかし目の前は真っ暗だった。また、振り出しに戻りたかのようだつた。朔夜は諦めたかのように、またあの時と同じように歩き始める。すると、今度はいとも簡単に蠟燭が灯る階段が現れた。

「同じ事の繰り返し?なのでしょうか?」

「あ~と溜め息が出た。

そして再び突き当たつた扉に手を触れる。

「誰じや?」

再び、岡じ声の主が同じ事を問う。しかし、さすがに今度は驚かなかつた。

「都往朔夜」

朔夜はいつものんびりとした口調で答えた。今度はさつきとは違う。すんなりと扉が開かれた。そして、同じように光の中に身を投じることとなつた。

その先は、やはり空中で……地上を落下しながら眺めると、地上は縁が碧青とした夏の様相。

いましがた迄雨でも降つていたのか?キラキラと乱反射する大地。そして、空の彼方に虹が薄らと掛かっている。一重になつてゐる虹を見るのは初めてであつた。

再び、空氣に溶け込もうと試みたがどうやら今度も適わないようだ。

そこで思い出した。確か……

「ハーム!」

朔夜は辺りを見渡しながら、ハームを呼んだ。ハームは何処からか飛んで来て朔夜を受け止めた。

「良く覚えておつたなも～ガハハハ！」

気分良さ氣にハームは朔夜に話し掛けた。

「これは現実なのかい？」

朔夜は、取り乱すことはなかつたが、いたさか不満だつた。

「夢なのか？現実なのかは己が感じたように振る舞う事じやの～儂は何も知らん。が、色々な事を知つてあるのう～ガハハハハ！」何を言いたいのか？朔夜には判らなかつたが、こうなつてしまえばもう行き着くとこ迄やつてやろうとそう想つた。同じ事の繰り返しになつても良いと思つた。

しかし、ハームは今度は塔がある所へと向う事はなかつた。塔の上空を飛び去る。その事が不思議に思え朔夜は問いかけた。

「どうしたんです？塔に向うのではないのですか？」

その言葉に、

「誰もそんなことを言つた覚えはないのだがのう～」

ハームは再び大声で笑つていた。

何を考えているのか解らなかつたが、どうやら今度は深い森の中へと向つているようである。どうもこのハームは、何かを確實に知つてゐる。いや自覚がないのかも知れないが、確かに朔夜をある一点の方向へと導いているかのようである。

「さて儂が入れるのはここ迄だ。後は自分の手で道を切り開けよ。人の子よ」

朔夜を地上に下ろしそう言つと、すんなりとその場から飛び去つて行つた。

一人取り残された朔夜はその後を田で追つていたが、暫くすると踵を返し、森の中へと踏み出したのであつた。

森の中は鬱蒼としていた。光が差し込みむいようなそんな森の中、道にそつて歩く。時々、枝に止まつていた鳥が飛び去つて行く。朔夜の気配を感じたのであつた。落ちた小枝を踏みしだく度に、足音が響く所ではその現象が何度も起つた。そして、遠田でも解る

ようにある一点にだけ薄らと光が差し込んでいる箇所がこの道ぞいにある事が解った。朔夜は何かが誘いかけているかのよう駆け出した。何かが自分をそこで待っているかのよつた？いや、呼んでいるかのような気がしたのである。

その場所に近づいた時、ある影が朔夜の前に現れた。それは、ミズチであった。あの、水晶の中に封印されていたミズチ。いや？でも何処かが違う。そう、角がない。蠶がない。こんなに大きくなっている。そして、虎のような立派なミズチだ。

「待つておつたぞ……占夢者よ」

野太い声が朔夜を招き寄せるようにな囁いた。

「持つていたのですか？この僕を？あの……僕には良く理解できないのですが？」

朔夜は心の中で思つてゐることをそのまま口に出した。まるで、このミズチは朔夜の心の中を覗き見るかのよつたそんな田つきであったから。

「うむ。その気持ちは解る。汝に望む事はただこちからのみだけだからのう~」

「要望……ですか？」

「塔へ行つて来たのであるつ？」

「ええ。行きましたが……そして、占夢を行つた。しかし、結局導かれて来たのはこの場所で……」

「ここは、夢と現の狭間じや。汝を呼んだのはこの儂じや。要望はただ一つ。塔で生まれた子供のことじや……あれは儂達の子供かもしれん」

すると、そのミズチの奥からまた一体のミズチが現れた。

「ですが、あの塔にいたミズチ達は、自らの子供だと言つてましたが？」

「だから、その証を確かめたいと想つとる。ここに儂の子供があるそこには、竜神と同じミズチの子供がいた。軽くその子供と言わ

れるミズチを見たが、一瞥しただけで、話し始めたミズチの親に視線を戻した。

「取り違いつ子なのか？それとも、この事が本当に正しいのか？儂らには解らんのじゃ」

横にいるミズチもそう考えているらしく、軽く領いている。

朔夜は、混乱していた。どう言つことだ？子供が取り違えられている。そんな事があり得るのか？ミズチの世界に病院でもあるのかと考え込んだがそんな物はあるはず無いだろう。

「生れつきなのでしょう。違うのですか？」

塔からこの森はかなり離れている。だけど、実際生れ落ちたのは似ても似つかない種族。親が心配するのは当たり前だ。そして、今度は子供のミズチをしつかり見た。良く見ると鬢がない。角もない。確かに、龍神と云われてる物が備わっていない。

「向こうの子供を見たか？鬢が有るか？角は有るか？」

ミズチは問うた。

「……ありました」

「ならばここに差し出せ。そのモノを！」

朔夜は、押し黙った。差し出せと言われても、どうやって？

「自ら確かめに行けばよろしいかと思われますが？そして話し合つのが良案でしょう？」

しかし、その問いに関して直ぐさま否定の言葉を返して来た。

「ダメなんじゃ。それは出来ん。儂らの世界での種族のしきたりじや罪を犯す事は出来ん」

ハツキリとした口調と大声がまるで朔夜をかみ殺すぞといわないばかりで……朔夜は内心弾かれたような心臓の鼓動を感じた。

「しきたりですか……だからこの僕を橋渡しにしようと考えたのですね？」

「長い事待つた。この日を……」

長い時間。その言薰は今の朔夜の心に響いた。現実で待つてている少年もこうやって長い時を、死もなく生き抜いてきた。同調してい

るのかも知れない？」このミズチの子供たちに……

「解りました。ならば、説得して来ます。鬪と角を条件といふことで良いのでしょうか？」

「そうだ。それを儂達の前に差し出せ。それだけで良い。それ以上は望まない。ただし、偽物を持ち込むことは出来ぬと思え。その事が守れない眼り、この占夢は成功しないと思え！」

「解りました」

朔夜はその言葉を最後に、意識を開放した。

朔夜は、自分がいる所を確認した。間違いなく塔の中には自分を把握した。

その起き上がつた朔夜に、塔の中にいる龍神一体が心配そうに見詰めていた。

「どうでしたか？成功したのですか？」

母親の方は一杯一杯の感じで朔夜を見詰めている。とにかく何とか成功して欲しいのである。

「森の中にいるミズチの子供の話は御存知ですか？」

朔夜は少し回りくどいかも知れないが、取り敢えず聞いてみようと思つた。

「森の中といふと、あの別種族のミズチか？」

父親が訝しげな表情で朔夜に問い合わせた。

「ええ。そうです。御存知ですか？」

その答えは『ノー』であつた。

「占夢で、あなたの方の子供の鬪と角を要求して未ました……必ずこのミズチの角と鬪を……」

父親は乱暴にその話にも『ノー』と言つた。母親も然りである。

龍神であるこのミズチの大切な身体の一部を要求していると云うことが許せないらしい。確かに、このミズチとその両親の正統なるつながりだと言えるだろ？

しかし朔夜は、

「それが適わないならば、あなたの方の子供はこのまま一生眠り続ける事になりますよ？それでも宜しいのでしょうか？道は一つしか有りませんよ？」

気持ちは解るが、この両親にとって眠り続ける子供を見守るのは辛いであろう？だから残酷な事を言ってみせた。

両親は自らの子供を見詰めた。どうすれば良い？実際グラついている感情が手にとつてわかる。

角をもぎ取り、鬢を切り落とし……そんな酷な事をこの口の一存で出来やしない。子供可愛さと、助ける為の一者择一。

その為、父親と母親は判断する為の討論をし始める。その場に朔夜がいる事を忘れているかのように激論は続く。朔夜はそれを黙つて聴いていた。何も口を挟むことは出来ない。時間は容赦なく過ぎて行く。

どれほど時間が過ぎたであろうか？朔夜は余りにも時間が過ぎている内に、眠気に襲われ近くに有る椅子と言つには大きすぎるひじ掛けに身を委ねていた時の事であった。突如静かになつた。

どうやら結論が一体の龍神達の間で決まつたようである。

「わかった。この子を助ける為にも、その要求を飲もう」

唸るように父親の方のミズチが言った。

「それしか方法がないのであれば……」

母親の方も納得したらしい。

朔夜はいたたまれない気持ちを心に秘め領いた。

「ならば、実行に移しましよう。僕が全てを見守つてますから」

こうして、全ての取り引きが終わる。

見事に切り落とされた一本の角。そして削ぎ落とされた鬢を、真っ白な大きな袋に詰め込んだ。それを受け取った朔夜はズシリとその重さを腕に感じた。いや？腕と言つより心に感じたと言つた方が適切かも知れない。とにかく、三体分の思いがここに詰まっている事は確かだ。そして、気持ちを整理すると、

「行つて来ます」

再び、あのミズチ達の元へと旅立つたのであった。

夢のまた夢

再度眠りに就く朔夜の夢の先は真っ暗な闇だった。しかし、今度は一步踏み出した時いつも現れる階段が浮き立つた。

どうやら、現実と夢は近い所に有るらしい事が解った。近づいた。いや? 一つの世界が融合し始めたのでなかろうか? と感じた。

階段を下りると、再び扉が立ち塞がる。いつもの事だと云う様に扉に手を触れた。するとあの声が聴こえてきた。

「都住朔夜」

パスワードは完全クリア。そして、再び光の中に躍り出る。真っ白な光の中に、田を凝らし、落ちて行く身体を感じながら、「ハーム!」

もう、忘れる事の出来ない固有名詞が口から漏れる。その声と同時に、ハームは朔夜の前に現れ上手く朔夜を背中で受け止める。トスンと云う軽い音が聴こえた。

眼下には、秋の様相があちこちに見られる。色とりどりの紅葉した森が眼下に広がっていた。少し肌寒い空気が朔夜の身体をすり抜けて行く。

「モノは手に入れたのかの?」

ハームは朔夜の片腕に有る白い袋を知り得ていながら問いかける。

「ええ。これで、全て片がつくでしうね?」

朔夜は、このハームの事が不思議に感じられて来た。一体このハームは何者なんだろう? こんな事の橋渡しを買って出て、何もかも知り過ぎている。そんな事ができるのは、この世界をおさめる神しかしないのでなかろうか?

「何者か? ガハハハハ! そんな事はどうでもいい事よのう? 人の子よ? 事を見守るモノがあつても何も不思議では有るまい? どんな

な世界にでも法則と言つモノがある。我が輩もその一部。そなたも
その一部。解るか。人の子よ？」

何だか不思議な気分だつた。このハームは人の心を読む。もう、
このハームが何モノでも良いような気がした。そう、朔夜がこの占
夢をしているのも、世界を動かす一部なのだと理解した時に決まつ
ていたのかも知れない。

「納得したか？ほれ、目的地はそこだ。行つて参れ。上手く事が済
めば、また一步心理に近づくのであるのだからな！」

ミズチは下降し森の入り口へと朔夜を誘つた。

森の入り口に下ろされた朔夜は、ハームが立ち去つて行くのを振
り返らずドンドンと歩み進む。

そして、再びあの場所に辿り着いた。

「持つて参つたか？」

ミズチは、今か今かと待ち望んでいた物を……朔夜の肩から掛け
ている白い袋を搔つ攫つうように奪い取ると、その中身を確認した。
確かに一本の角と、鬚がその中にあつた。

それを取り出し、ミズチは自らの子供を呼び寄せた。子供は母親
ミズチの間をかいぐべりヒヨロヒヨロと這い出して来て、父親の所
迄やつて来る。

「これをお前に託そう」

ミズチの子供の頭にその一本の角を翳した。すると驚いた事に切
り取られたはずの引っ付くはずもないと思われたその角がその子供
の頭に吸い付けられるように引っ付く。

まるで、夢のようだ。いや？ここは夢と現の狭間だつた。引っ付
いたとしてもおかしくはないのだと朔夜は納得した。その瞬間、世
界が蠢いたような気がした。ドドドという遙か彼方の土地が動いた
かのような、そんな感触。しかし、その感覚はすぐに落ち着いた。
何だつたんだろうか？と、思いはしたが、朔夜は、次のミズチの儀
式を見守つた。

ざんばらに切り刻まれた鬚。それをどうするのかと朔夜は興味を

持っていたからである。

ミズチの父は、袋から余す事無く取り出したその鼈を手の平に掬い出し、辺り一面に振りまく。すると、磁石がミズチの子供の背中に取り付けられているかのように、全ての毛と言う毛が一気にミズチの背中目掛けて飛んで行つた。そして、ミズチは竜神となるで変わらないように変化した。

「これで完璧だ。我が愛し子よ、去るべき場所に還れ！そしてこの世界を元に戻すのだ！」

朔夜は、目を見開く。今何を言つたんだ？去るべき場所？世界を変える？と、理解不可能な頭を抱えた瞬間、地面が盛り上がった。いや盛り上がつたと言うのか、地割れが起きたと言うべきか？地殻変動がこの森に起つたのである。

「都住よ。お主の事はこの世界で語り継がれよつぞ……そなたも居るべき場所に還れ！」

その言葉で、朔夜は意識を失つた。

居るべき場所？

何故か叶や、かえで、水城達の事が頑を過つた。しかし、次目を開いた時は塔の中だつた。その上、塔は崩れかけていた。そして、占夢を行つた時居たはずの竜軸二体の姿は何処にもなかつた。

朔夜は辺りに目を見張つた。パラパラと石煉瓦の崩れる破片が朔夜の目の端に映り込む。何だか煙たい感じがして咳き込んだ。

ベッドから『ミヤーミヤー』と云う鳴き声が聴こえた。何かがいる。直ぐさま朔夜は立ち上がりベッドに駆け寄つた。するとそこには、手の平サイズの猫のような？虎の子供のような赤ちゃんが丸くなつて鳴いていた。

朔夜は、その子供を取り上り上げ、抱きかかえた。

突然崩れ落ちる石煉瓦。間一髪でその子を抱え込んだ時、上から落ちて来たのである。ホッと息を吐いたが、一安心など出来ない。

何とかここを脱出しなければならない。朔夜は、扉を『バンッ』と放つて抜け出し、下に降りる為の階段を飛び下りていた。上がる時も大変だったが、降りるのも大変だ。しかし、悠長にしている事は出来ない。朔夜が降りて行く度に後ろからドンドンと石煉瓦が崩れて行く。間一髪ぐぐり抜けではいるが、いつ自らの足下が崩れ落ちるか気が気ではなかつた。時には一段とばしで駆け降りる。そうしないと、上から落ちて来る石煉瓦に漬されかねない。そして、足下がなくなる。

そうして、無事塔最下部に辿り着いた時、一気に外へと駆け出した。

外は冬の様相。辺り一面銀色の世界だつた。降り積もつた雪の上にほ足跡一つない。

空を見上げるが竜神はいない。もしかしたら、この冬の季節には冬ごもりをしているのかも知れないと想つた。

肌に刺す冷気が、朔夜の身体に突き刺す。凍えそつだつた。どうやつたらコノ世界から抜けだせるのか？もう何がなんだか解らなかつた。普段冷静に振る舞う事が当たり前だつた朔夜ではあつたが、この状況ではもう冷静でいる事など出来なかつた。

遠く先を見る。地面がない？というか、世界が崩れ始めている。そう思つた。もうダメかも知れない？終わりかも知れないと思つたその時、

「何故儂を想い出さんのじや？」
と頭の中で声が鳴り響いた。

「ハーム？」

朔夜は、その声の主を思い浮かべた。

「ハーム！」

朔夜は、思いつきり声を張り上げその相手を呼んだ。ヒームと飛んで来るその姿が目に映り込んだ時、朔夜は膝を落としそこに座り込んだ。ハームは、

「お主はもつと賢いかと思つとつたぞ？ガハハハハ！」

人の気も知らないと……毒づきたくなつたが、この状況を後ろ向きにしか考えられなかつた朔夜にしてみれば笑われても仕方ないとも思えた。朔夜は、腕の中に抱えている搭の子供を抱えたまま、ハームの背中に乗り込んだ。

「この子の両親はどうしたのでしょうか？」

朔夜は心配になり、ハームに問う。

「その子の両親はもうこの世にはおらん。己の命をその子に託した。あの時、お主が占夢を行つた時、定められていた運命じや……」

ハームは少し躊躇いながら、話した。

「運命？」

「そう、運命じや。ミズチの種族は細かくは四種類に別けられる。そして、今回異種族の子供がそれぞれ異種族間に産まれ落ちた。そこから運命は決まつておつた。そうしたのは儂じや。この世界を統べる儂の意志じや……いや？この世界を創り上げたのは人間でも有るんじやがの？判らんかもしれんが、全ての世界は繋がつとる。連鎖じや」

「達鎖……」

「その子はもつ、この世に居てはならん子じや。お主の居るべき世界で成長することじやうひ。今生まれ変わつたのであるからのう。新しい生命じや……」

そこ迄言つと、ハームは、急遽に空高く舞い上がつた。希薄な空氣で朔夜は眩暈がした。ハームが何を言つているのかさえ聞き取る事が出来なくなつていた。そんな朦朧とした意識の中で、朔夜は、意識を失つたのである。

遠くで自分の寝前を呼ぶ声が聴こえる。もつ少しこのまままでいたい。しかし、意識はハツキリと現実に戻つたのである。

再生

朔夜が覚醒した先では、叶が必死になつて身体を揺すつていた事に気がついた。

「……どうしたんです？叶？」

朔夜ほモゾモゾと身体を起しながら、その先を見上げた。
「いきなり、助けてくれなんて言つんやもん。起きなあかんやろが！」

つまり、朔夜は、占夢の間に寝言を言つたようであつた。こんな事は初めての事なので、叶が思わず起したのであつ。流石に冷静でいた水城も心配そうに朔夜の顔を覗き込む上うにして見上げていた。

「あ、ええ、大丈夫です……心配かけて……」

と言いかけた時、背後の水晶に阻まれたミズチがいる所がいきなり光り始めた。色んな色で光り始めた事で、ここにいる五人は振り返つた。何が起こつたんだと言わんばかりに、目を見開いて。

『ガラガラガラ……』

水晶の壁が崩れ始めた。そして、この洞窟内をも揺り動かしていった。どんな力がそうさせるのか？五人とも理解できなかつた。砂ぼこりが頭上から落ちて来る。

「ヤバイでここは！早出なあかん！」

叶が、口火を切つた事で、他の四人も洞窟の外に駆け出しあじめる。その駆け出し始めた時、少年に向つて一本の光の束が、洞窟の水晶のあつた所から突き刺すように放たれたのである。

「うつ！」

全身に電撃が走つたかのような痛み。少年は倒れ込んだ。こんな痛みを感じたことなどはなかつた。蹲り、立ち上がる事が出来なか

つた。後ろからそれを見ていた朔夜が抱き抱えるようにして少年を洞窟から救い出す。軽くて良かつたと朔夜は想つた。

先頭を走る水城は後ろで何が起こっているかなど解る事は出来なくて、一気に駆け出していた。

外はもう朝日が昇つていた。雨は止んでいた。みんな寝不足だつた。立ちふさがる流れ落ちる滝。その細い足場に気をつけながら進む。奥の方で崩れ落ちた岩の音が耳に届いてホッと息をつく。何とか五人は無事洞窟から出る事が出来たのであつた。

五人は、もうクタクタであった。

かえでは、徹夜明けの目を擦りながら、地面に座り込み青空を仰いでいた。水城は、ポシェットから隠し持つていた非常食を他の四人に配り始めていた。叶は寝つ転がつて、今にも閉じそうな目蓋を開けたり閉じたりしながら何とか意識を保とうとしていた。

朔夜は、グツタリとした少年の顔を叩いて意識を回復させようとしていた。

どう云う訳か、少年は目を醒まさない。あの光の束が影響しているのか?とも思つたが、それを見たのは、最後部を走つていった朔夜にしか見る事が適わなかつた為、他の者に話したところで理解できないだろ?。だから、何も言わずにただ覚醒させる為の行為を行つた。

その内、朔夜が何をやつているかを他の三人は集まつて見守りはじめた。

「何や起きんのか?」

叶は、朔夜に問いかけるが、朔夜は何も言わずにとにかく行為を続ける。

「待つとれ、そこの滝の水汲んでくるさかい」

田を醒ませるにはそれが一番良いと思つたのか?叶は、水城の水筒の蓋を借りて水を汲んでいた。そして、額に掛けた。

かえでは批判したが、叶は珍しく何も言わずにジッと少年の表情

を見守っていた。すると、少年の目が薄つすらと開かれた。四人が集まつて自らを見守つてゐる事に気がつき、少年はハツと我に返つた。恥ずかしいとでも言わんばかりに、顔を赤く染めている。

「良かつた」

かえでが、ホツと息をついた時、

「ゴロゴロ、ミヤ～ゴ」

と、鳴き声が響いた。

「？」

描の鳴き声が耳に入り周りを見回したが、何処にもその気配がない。すると、もう一度同じように鳴き声が聴こえる。それが、少年の所から聴こえた事に気がつき、みんなが少年を見た。

「ここから聴こえたよね？」

水城も少年をジツと見た。

「うん。確かに。ここからだよね？」

かえでも不思議そうにジツと少年を見た。

少年は、何か胸の所で蠢く物に気がつき、羽織をまさぐつた。いつの間にか、猫が……いや、猫にしては、足が太い。虎の子供……が顔を覗かせた。

「可愛いー！」

かえではその猫の両腕を取り上げ、抱きかかえた。それを見て水城も頭を撫でた。

「朔夜？どう言つてちや？これは……」

「この子は、多分ミズチの化身ですよ。占夢でこの世に生まれ変わつたのだと

「ミズチ……これが？」

かえでは目を丸くして、その会話の一部を聞き取つてゐた。

「ちゅう～いとは、占夢は成功したつちゅう～いつちやな！凄いで！おい！」

バン、バン、と朔夜の背中を叩く叶。その度に身体が謡れ動き、痛いと朔夜は言つたが、叶は耳を貸さなかつた。

「成功したと言つ事は……私は、もう死ぬことができると言つ事で
しょうか？」

少年は、何とも不思議だといわんばかりに、田を見開いた。色素の薄いその瞳が朔夜を見詰めていた。

「死ぬと言つ言葉は控えた方が良いですよ。成長する。やつ言つて下さった方がこの赤ちゃんは救われますから」

朔夜に、占夢時に培つた物を想い返しながら少年にそう伝えた。少年も、それを感じ取つたのか、もう一度とその言葉は使わなかつた。そして、五人はこの場を立ち去る事にした。

「なあ、少年？俺らの事、話さなあかんな？」

弥山を降りる為のロープウェイの中で叶は、これで少年の件は全て解決したと思っていた。そして早速言葉を発した。確かに、この旅は五行探しの旅だ。一時を争うと云つ時のその大切な時間を丸一日潰してしまつた。もし、この少年が自分達が捜している五行の者ならば、ここで仲間にしておかなければならぬ。

「そうですね。お話を聞きましょ」

少年は叶が話すべき事を全て聞いた。そして、

「私は、水を司る陰陽師。それは確かじやけど。しかし、あなた方が捜していると云つ陰陽師である証は有りません。そんなお告げを聞いた事も有りませんし……」

少年は、千年以上前から生きていた。そんな長い時間生きていて、何の予言も聞いてないとあつちやどうすることも出来ない。証はない……だけど、叶は思つた。確かにこの場所に、富島に陰陽師がいるはず。この少年以外考えられないではないか？

だから、

「なら、一時俺達と行動を共にしてもいいやうな事にしてもらいたいやろか？俺らはこれからまだ捜さなあかん陰陽師がある。それに、この場所で独りおるのも何やろ？これも何かの縁や、食事代も旅費

もこの俺が出してやるさかい。どや？」

叶にしては珍しく気の効いた言葉を掛けた。

それを見ていたかえでは、

「あんた子持ちになる気？」

と茶々を入れたが、

「え？ かえでちゃんとこの子の面倒見てくれるんとちやうんか？」
と、舌を出して問い合わせる。

水城は思わず『ブツ』と吹き出した。朔夜は笑いを押し止めている。肩が震えていた。

「もう！ 解かつたわよ！ ただし、この子の為にするんだからね、叶。あんたの為にするんじゃないわよ！」

かえでは憤慨しながら、腕組みし『ツン』とロープウェイの窓の外を見た。

そんな時、朔夜の携帯電話が鳴った。

「あ、域戸君……はい。はい。解りました。では広島駅で」
静かに電話を切った。

「何や？ 直紀から電話かいな。で、こっちに着いたんか？」

「そうらしいですよ。昨日着いたらしいんですけど、こっちに電波が届かなかつたみたいですね」

山奥にいたから、届くはずはないわな。と、叶は思つた。

「しかし、疲れたわね？ 少し何処かで休みたいものだわ」

「賛成！ 水城も疲れちゃつた！」

女二人にそう言われると、叶は仕方ないと、富島を出たら一度休む為に何処かの旅館か、ホテルを取ろうと言つた。朔夜もそれに賛成した。

自らも長い占夢で体が疲れ切つていて、あれを占夢とは思えないが……

そんな中、一人、疲れた身体を感じながら水城は頭を傾げた。中國通の知識を持っている水城としては、納得が出来ない事があった。白虎に似た容貌のミズチは確かに、金の属性の保護の元に生を受け

たはず。水を元素としているのは玄武という伝説の生きもの。そして北を護る守護神。それなのに、この少年は水を元素とする陰陽師だと言つ。何かの間違えなのだろうか？それとも、日本古来のミズチはこうこうのモノなんだろうか？ちょっとと引っ掛けつてはいたが、まあ良いかと、朔夜達の後について行ったのである。

一行は、取り敢えず富島を離れると、JR広島駅の近くにあるホテルに宿を取つた。

「ところで、あんさんの名前考えとつたんやけど、水の陰陽師つちゅう事もあつたし、これから先の事も兼ねてなんやけど、『潤』ってのはどうや？」

叶は少し照れながら話を切り出した。漢字はこう書くねん。とメモ帳を取り出しそれに力強く書きなぐつた。

男三人、女一人別の部屋を借りたそんな、男三人の間で話が始めた。

「潤。ですか？良いですね。その名前は」

朔夜は意外に思ったのか、叶を見直したように返すと、少年を見た。

少年は瞬時、以前自ら育てた赤子の潤を思い出した。自らが付けた名前であり、思い出が一杯詰まった名前。自らの名前は忘れても、あの赤子の事は今でも鮮明に思い出す事が出来た。

何と云つ偶然だうと思つた。自らその事は叶や朔夜達には伝えていない。その名前が今自らの名前になる？だから少年はコクンと頷いた。

「決まりやな！名字はどないしよ？それに、ミズチにも名前付けてやらんとなあ～」

そんな矢先、コンコンとトリプルの部屋のドアを叩く音が聴こえてきた。そのドアの先にいたのはかえでであった。

「ちょっと良いかな？キミ、キミちょっとおこでよ…」

ドア先のかえでは、両手に大きな紙袋をひつ下げていた。

「なんやねん。かえでちゃん？お言葉を返すけどな、キミじやなくて、潤なの！」「ん子は！」

珍しく不機嫌な叶に相反し、上機嫌のかえでは、

「あんたに用事じやないのよ。黙つてなさいよね。えーと潤君？」「つちおいで～」

かえでは猫なで声で、潤を呼ぶと自らの部屋に来るよつに言った。 「なんやうな？あの態度……でも、あんなに楽しそうにしているかえでちゃんは珍しいかも～」

叶は、朔夜に向つてぼやいた。しかし朔夜は何だか楽しそうにしている限りは安心だらうとそう思つていたのである。そういう朔夜はミズチを抱きかかえていた。ミズチは静かに寝息を立てている。しかし、かえでのあの嬉しそうな態度がなんであるのか、じきこの部屋に少年が帰つて来た時に理解出来た。

「！」

一人は目を丸くして潤を見た。潤も何だか不自然に緊張しているみたいだった。

「こう云う事かいな……」

叶は、少年が、かえでの着せ替え人形になつていることに気が付いたのである。

あの、身汚い時代錯誤な服装を一変しているのは良いとしてだ。 なんで半ズボン？この薄ら寒い時期に……スラッとした色白い脚が露わになつてている。それに、長い髪を一つに車ねた所には、髪の色に映える緑色のリボンが……

「頭が痛い……朔夜、俺寝るわ……後、よろしくうな……」

ベッドにいきなりドガツとつ伏せに飛び込んだ。 そ�は云われても……と朔夜は苦笑いした。電池が切れたよつて、眠りに就く叶。 よほど疲れていたらしい。

「私……やはり変じやうか？」

朔夜は戸惑つたが、まあ、かえでの趣向だし……半ズボンは、少年の歳からしたらちよつと不自然だけど、見た目の歳相応の服装ではある。だから、

「似合つてますよ。そうですね……自分を呼ぶ時『私』ではなく『ボク』と言つた方が良いかも知れませんね？」

朔夜はクスリと笑つて少年の頭を撫でた。

「ボク？ ジャロか？」

「そうですよ。その方が良いですね？ 今から少年時代をやり直すのも悪く有りませんし。そうしましよう。それに、この時代を難無く過ぎ去るのに良い事だと思いますよ？」

朔夜は現代版少年の像を思い描いた。それならば、変ではない。リボンは別にしても……

「じゃあ、少し休みましょうか？ 城戸君にここを知らせておきましたから、その内来るでしょうし、その間に充分休息しましょうね？」

三人はそうして時間を有効に使つた。

今はゆつくり休みたい。

心は夢の中に落ちて行く。そして、何故かホームの声を聞いた気がした。

「都住朔夜よ……汝が宿命を受け入れるのは後僅か……それまでゆつくり休養せよ……ガハハハハハハハ……」

笑い声は、いつ迄続いたのか？ それすら覚えていない。でも、この眠りを失いたくない。そしてゆつくり夢の中を感じていたかつた。それが今自分に一番必要な事に感じられたからであった。

#8 再生（後書き）

長い事眠らせておいたので、此処に上げるのはどうかとは想いましたが、この続きもあることだし、またちょっとお時間いただくことになりますが、お付き合いで頂ければ嬉しいです。次は、伍ノ巻でお会いいたしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2869e/>

占夢者人の夢～四ノ巻～

2010年10月8日15時33分発行